茨城県下館市

弁天古墳群

－発掘調査報告書－

2004

下館市教育委員会

序

下館市は関東平野の北部、茨城県の西部に位置しており、市内には鬼怒川、大谷川、勤行川、小貝川の４本の一級河川が南北に貫流し、肥沃な大地に恵まれ豊かな田園地帯となっております。

今回、市道拡幅工事に伴い発掘調査を行った弁天古墳群は、先に刊行いたしました弁天遺跡の調査地点に隣接し、鬼怒川左岸の台地縁辺部の女方地区に所在しております。今回の調査では、弁天古墳群の２号墳（猫塚古墳）に伴う周溝と、平安時代の竪穴住居跡１軒が検出され、これまで女方地区では、縄文・弥生・古墳時代の遺跡が確認されていましたが、本調査により、平安時代にも人々が生活していたことが明らかになりました。

この報告書が今後、郷土の歴史を解明する資料として広く活用されることを念願いたします。

最後になりましたが、今回の調査に際し発掘調査から報告書の作成に至るまで、ご協力いただきました山武考古学研究所ならびに関係機関・関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成16年７月

下館市教育委員会

教育長　大泊　信雄

例　　言

1．本書は、下館市女方に所在する弁天古墳群の発掘調査報告書である。

2．調査は、市道拡幅工事計画に伴い、下館市より委託を受けた山武考古学研究所が下館市教育委員会の指導のもとに行った。

3．調査については、以下の通りである。

所 在 地　茨城県下館市大字女方字両海105-1の一部、111-1の一部

調査面積　144㎡

調査期間　平成16年2月17日～2月25日

調査担当　土生朗治（山武考古学研究所所員）

4．本書の執筆は、土生が行った。編集は、下館市教育委員会の指導のもと土生が行った。

5．調査中は、下記の諸氏、諸機関に協力を得た。（敬称略・順不同）

鶴見貞雄　㈱東日本重機　㈲新成田総合社

6．調査・整理作業の参加者は以下の通りである。（順不同）

鈴木正弘　北原　隆　荒川　博　芝田武治
五十嵐隆　伊藤順子　黒沢澄子

凡　　例

1．挿図中方位は座標軸北を示す。

2．挿図中に使用したスクリントーンは以下の通りである。

須恵器断面　　地山

目　　次

序　例言　凡例　目次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境 …… 3

Ⅲ　試掘調査の概要 …… 3

Ⅳ　調査の方法と経過 …… 4

Ⅴ　調査の成果 …… 5

挿　図・表 目 次

第1図　遺跡の位置図1 …… 1

第2図　遺跡の位置図2 …… 2

第3図　調査区の位置図 …… 2

第4図　試掘調査位置図 …… 3

第5図　弁天古墳群・女方古墳群分布図 …… 7

第6図　調査区及び弁天古墳群2号墳平面図 …… 8

第7図　周溝エレベーション・土層断面図 …… 9

第8図　1号竪穴住居跡 …… 10

第9図　出土遺物1 …… 11

第10図　出土遺物2 …… 12

第11図　出土遺物3 …… 13

第1表　出土遺物観察表 …… 14

写真図版目次

図版1　調査前風景及び2号墳周溝写真

図版2　1号竪穴住居跡及び出土遺物（1～8）

図版3　出土遺物（9～32）

図版4　出土遺物（33～38）

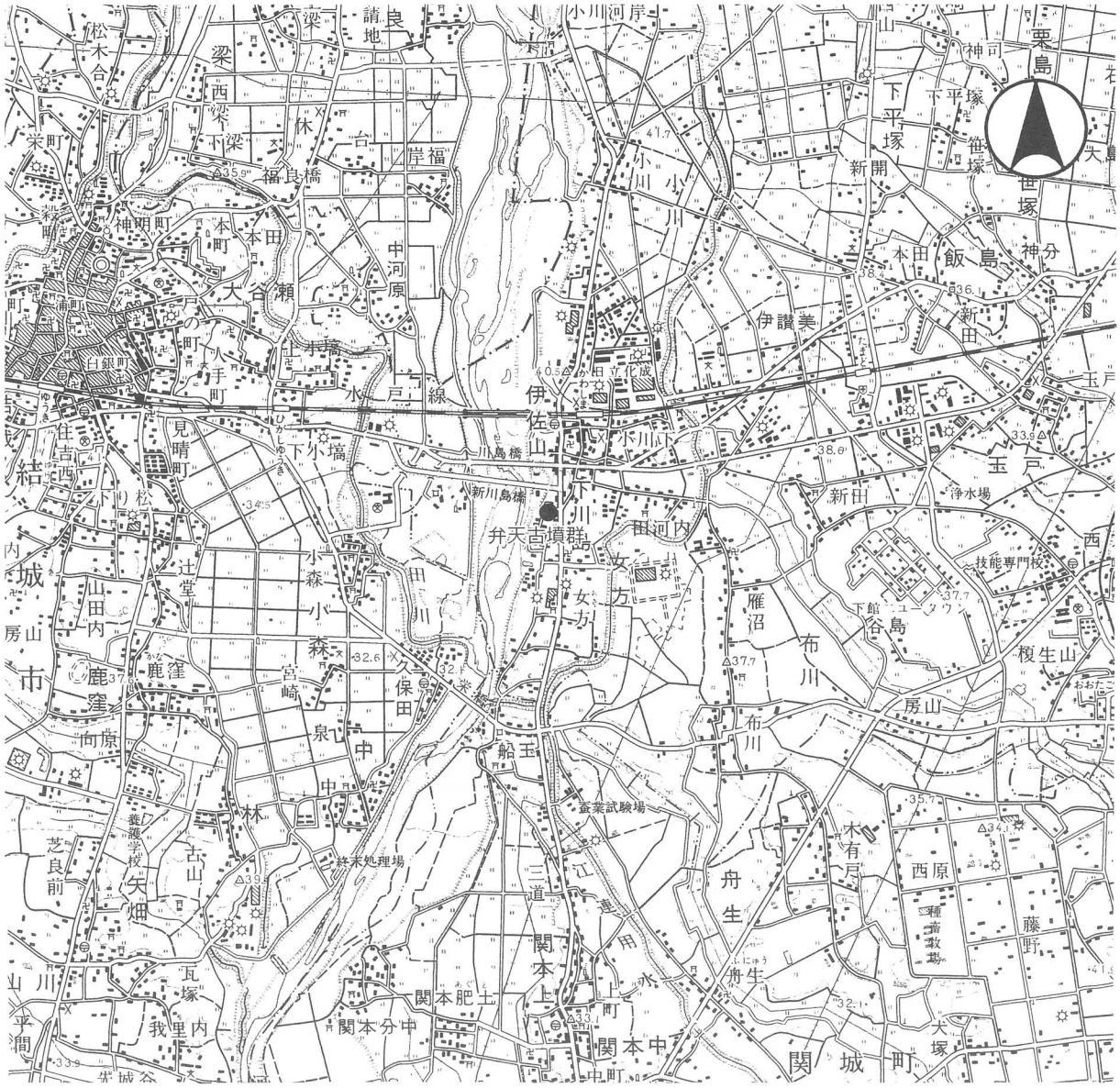
Ⅰ　調査に至る経緯

平成15年12月、市教育委員会は市土木課より茨城県下館市大字女方字両海105-1の一部，同111-1の一部において市道拡幅工事計画の連絡を受けた。この地域は、弁天古墳群(下館市遺跡番号029)の範囲内であり、道路拡幅工事に際して事前に埋蔵文化財の調査が必要である旨を伝え、その取り扱いについての協議を行った。

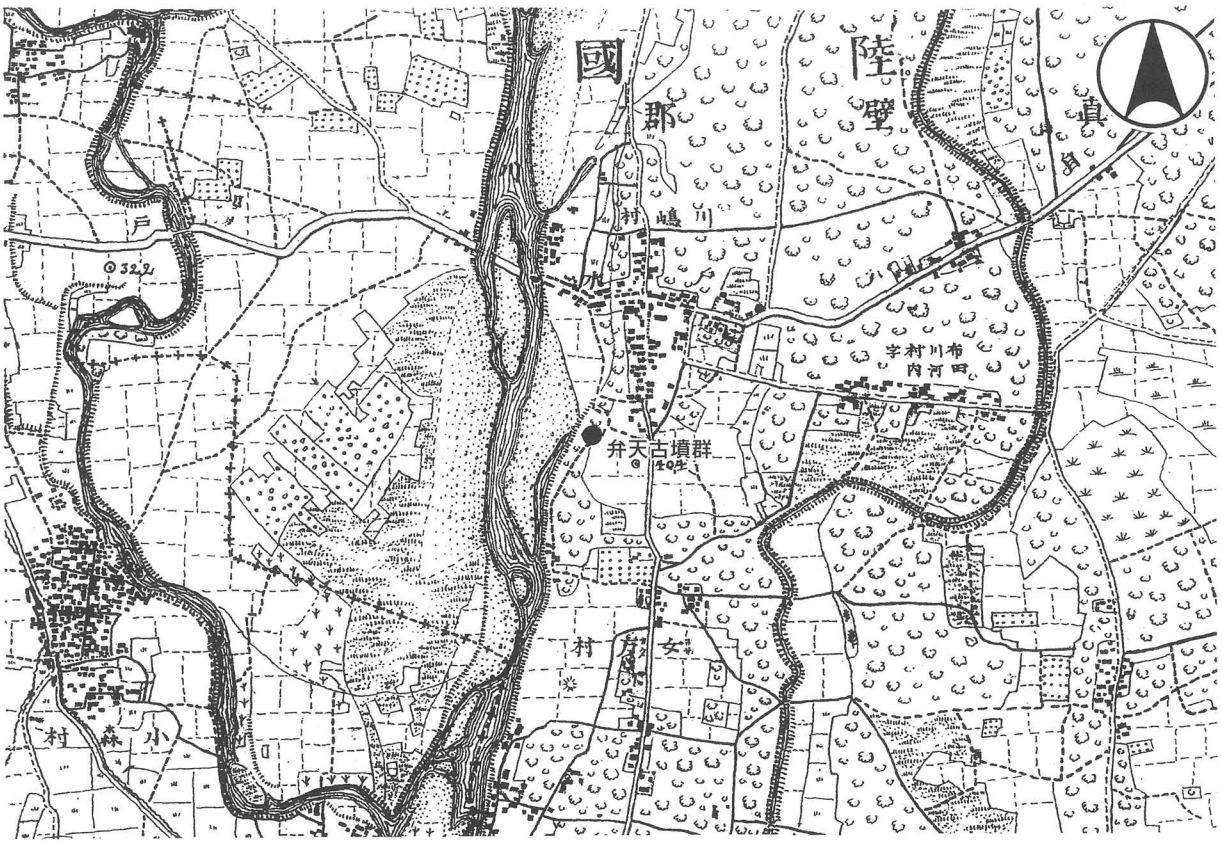
その結果、平成16年１月９日に埋蔵文化財の所在の有無を確認するための試掘調査を行い、弁天古墳群２号墳（猫塚古墳）の周溝と平安時代の竪穴住居跡１軒の存在を確認した。

市教育委員会は、これらの埋蔵文化財の取り扱いについて市土木課と再度協議を行った結果、上述の遺構が検出された市道拡幅工事計画区域の南半分について、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

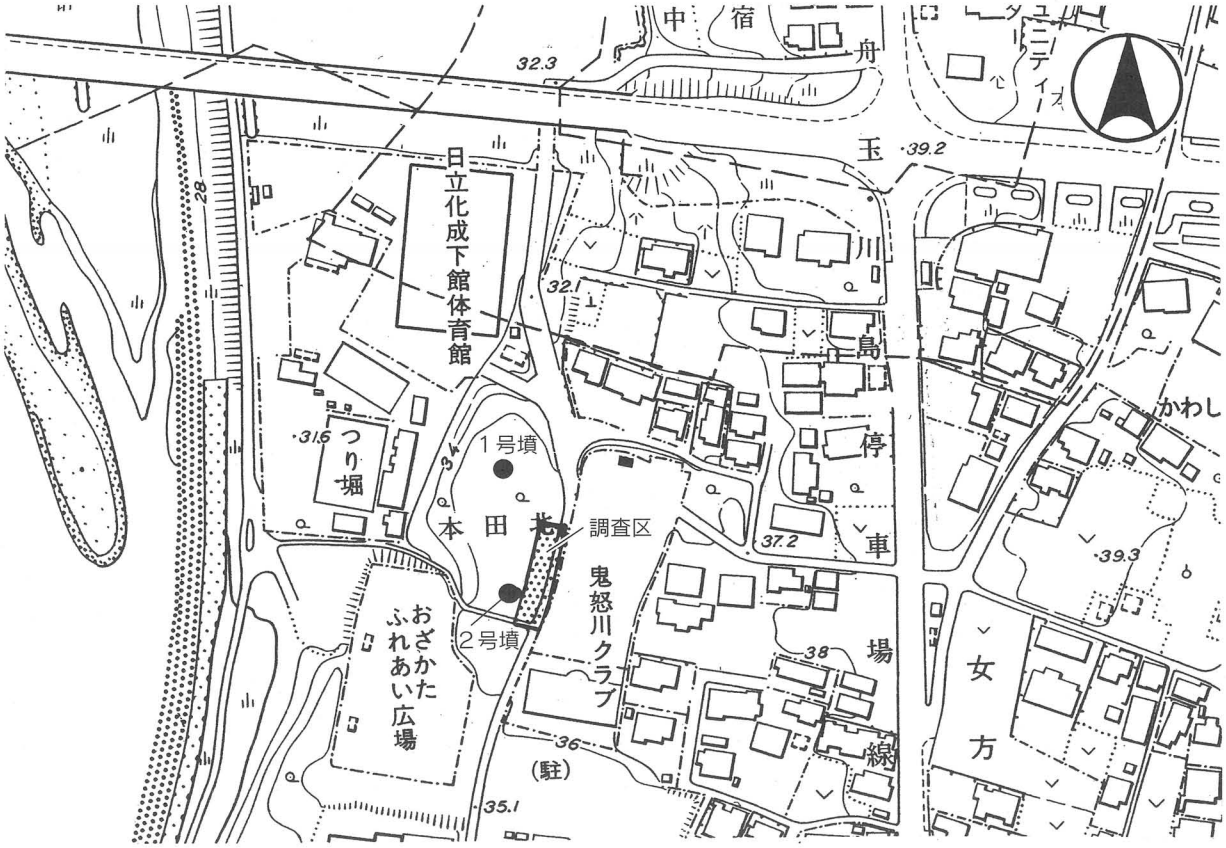
その後、文化財保護法第57条第１項、同第99条第１項及び文化財保護法施行令第５条第１項の規定に基づき、平成16年１月15日付け茨城県教育委員会教育長あて埋蔵文化財発掘調査の届出を行い、山武考古学研究所を調査主体とし、市教育委員会指導のもと、２月17日から同月25日までの６日間にわたり発掘調査を行った。



第１図　遺跡の位置図１　　S＝１：50,000



第２図　遺跡の位置図２　　Ｓ＝１：20,000　明治19年測量迅速図



第３図　調査区の位置図　　Ｓ＝１：2,500

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境

下館市は、茨城県西部に位置し、北は栃木県に、東は真壁郡協和町に、南は明野町・関城町に、西は結城市に接している。地形的には、中央部に勤行川、東に小貝川、西に鬼怒川が南北方向に流れ、流域に沖積世低地が広がっている。市の東部や下館市中心部から北側の小貝川沿い、協和町と接する地域には、南北方向に洪積世台地が延びている。

下館市内の遺跡は、鬼怒川左岸や勤行川右岸の台地縁辺部や自然堤防上等に多く見られる。旧石器時代の遺跡は、八丁台遺跡から安山岩製の石核や剥片が出土している。縄文時代の遺跡は、前期では下江連地区の十二天遺跡、中期では前原遺跡や大関遺跡、後晩期の遺跡では大谷川左岸の低地にある外塚遺跡等がある。本古墳群に近い本田前遺跡からは、前期・後期・晩期の遺物が、本古墳群と隣接する弁天遺跡からは後期の遺物が出土している。弥生時代の遺跡では、女方遺跡がよく知られており、本古墳群の南方至近距離にある(参考:第５図中のB地点)。古墳時代の遺跡では、本古墳群の南方の女方古墳群には、古墳時代前期から後期頃の古墳があり、白亳を持った埴輪が出土したことでもよく知られている。下館市野殿地区にある野殿深作遺跡は、古墳時代中期末から後期初頭頃の集落跡で、出土例の少ない初期須恵器が出土している。奈良・平安時代の遺跡では、鬼怒川をはさんだ対岸の結城市峰崎遺跡から下り松遺跡にかけて、大規模な集落遺跡が広がっている。

Ⅲ　試掘調査の概要

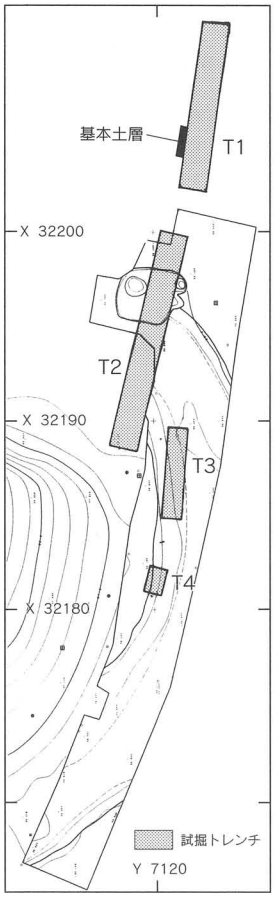
試掘調査の範囲は、現有道路の拡幅工事に伴うため、弁天遺跡・弁天古墳群に関わる範囲の内、南北方向長さ72m、幅４mである。この範囲は弁天古墳群の２号墳の墳丘の東側に隣接した位置にあたっている。

調査地区の東側は、埋没した谷地形のため土壌が厚く堆積しており、縄文時代後期を主体とした包含層になっているようである。西側の弁天古墳群側は尾根状で表土が比較的浅く、遺構の確認面は深さ約35～50㎝程度である。

試掘トレンチは、北から１号トレンチ（Ｔ１）、幅1.5m、長さ９m、２号トレンチ（Ｔ２）、幅1.5m、長さ11.7m、３号トレンチ（Ｔ３）、幅1.0m、長さ５m、４号トレンチ（Ｔ４）、幅1.0m、長さ1.5mを設定した。Ｔ１は表土が約20cmと浅く、遺構は確認されなかった。Ｔ２からは幅約８m、深さ約0.6mの幅の広い溝が確認された。同じく東側のＴ３、Ｔ４からも覆土や傾斜角度が似た溝の続きと考えられるものが確認されている。

Ｔ２内からはさらに平安時代と思われる竪穴住居跡が確認され、竪穴住居跡は溝を切り込んで確認されており、溝の時期は平安時代よりも古いものと判断された。溝の覆土下層からは内外面にミガキを施した土師器の甕が出土した。

Ｔ３の溝覆土からは、古墳時代の中期ないし後期頃のものと思われる土師器小片が出土している。その他に縄文土器や石器、弥生土器等の古い時代の混入遺物が出土している。溝は、平面上２号墳の東側を廻るように確認されている点から、古墳周溝の可能性が考えられた。



第４図　試掘調査位置図

Ⅳ　調査の方法と経過

1　調査の方法

調査は、幅４ｍ、長さ36ｍの道路の拡幅工事部分について行った。表土の掘削については重機を使用し、幅広の溝状遺構についても出土遺物の有無を確認しながら覆土上層の掘り下げを行うこととした。各遺構の掘り込み・精査作業は、作業員による手作業とし、順次遺物出土状況図の作成・写真撮影・土層断面図の作成を行い、完掘後に平面図及び全体写真撮影を行った。図面は光波測距儀、平板、デジタルカメラ等を使用した。図面の縮尺は全体平面図1/100、各遺構平面図1/20、土層断面図1/20、詳細図1/10とししした。写真は、35mmモノクロ、35mmスライドフィルムと必要に応じてデジタルカメラ、ブローニー版モノクロフィルムを使用し撮影を行った。

2　調査の経過

平成16年２月12～16日　　調査準備。

平成16年２月17日（火）

午前9：00調査開始。調査区南側から重機による表土掘り下げ作業・クローラーダンプによる調査地区外への排土運搬作業。古墳の南東部から東部にかけて緩やかに弧を描く、周溝と思われる幅広の溝状遺構を確認する。調査区中央部では、古墳の墳端に当たるラインを確認する。北東部においても、試掘調査で確認された溝と今回検出の溝が同一のものであることを確認する。さらに試掘調査で確認された竪穴住居跡を再確認する。午後から作業員を投入する。遺構確認状況写真撮影を行い、周溝中央部にサブトレンチを掘削し土層観察を行う。

平成16年２月18日（水）

調査地区北部で確認された竪穴住居跡の掘り込み調査。周溝上層覆土の掘削作業。竪穴住居跡覆土の土層観察・写真撮影を行う。重機・クローラーダンプ関連作業を終了する。杭打ち・基準点作成作業。

平成16年２月19日（木）

調査区南部と北東部の周溝土層観察用ベルトの精査。周溝中央部下層覆土の掘り下げ作業。竪穴住居跡の精査。

平成16年２月20日（金）

周溝南部下層覆土の掘り下げ作業。竪穴住居跡出土遺物取り上げ作業。

平成16年２月24日（火）

周溝北部下層覆土の掘り下げ作業。竪穴住居跡床下断ち割り及び竪穴住居跡北側遺構の精査作業。竪穴住居跡の北側の掘り込みが古い竪穴住居跡の一部であることと、北壁側に古いカマド煙道の残存部を確認。床上に、竪穴住居跡に伴うピット２カ所を確認。竪穴住居跡図面作成作業。

平成16年２月25日（水）

光波測距儀による平面図作成作業。平板を使用して、古墳の墳丘測量を行う。

Ⅴ　調査の成果

弁天古墳群は、前方後円墳の可能性のある弁天塚（１号墳）と呼ばれる長径約33m、短径約20m、高さ５mの古墳と径約12m、高さ４mの猫塚（２号墳）と呼ばれる円墳からなる古墳群である。調査地区は、２号墳の墳丘東側に隣接した位置にあり、調査範囲は現有道路の拡幅工事に伴うため南北方向に細長い長さ36m、幅４mの範囲である。

調査地区内における遺構の確認面は、調査地区の南部で地表面から約50㎝下の鹿沼層の上面、北部では深さ約35㎝の鹿沼ブロック混じりの褐色のハードローム層である。

遺構は、幅約5.6～7.0m、深さ約0.6mで緩やかに弧を描く幅広の溝と平安時代の竪穴住居跡が確認された。幅広の溝は、弁天古墳群２号墳の周溝と考えられる位置にあたり、ほぼ２号墳周溝と考えてまちがいないものと思われる。周溝は、土層断面図作成地点のB-B'、D-D'を境に北から１～３区と呼称した。

２号墳周溝

周溝は、緩やかな弧を描いており、円形を想定すれば直径約23mの規模が想定される。周溝の内側の傾斜は外側に較べて緩やかで、自然堆積の鹿沼層を切り込んでおり、鹿沼層の上層には盛り土の一部と思われる鹿沼ブロック混じりのローム層の堆積が見られたが、さらに上層の盛り土の堆積は調査地区内では確認できなかった。周溝を埋めている堆積土は、上層が自然堆積の黒褐色土（１～３層）で周辺部から流れ込んだと見られる縄文土器を主体とする混入遺物を少量含んでいる。最下層は鹿沼層に由来する鹿沼の小ブロックを少量含んだローム主体土で、古墳の構築時の堆積土層（５層）と考えられ、その上におそらく古墳構築後の最初の自然堆積土層（４層）と考えられるやや柔らかいローム粒子を含んだ褐色土が堆積している。遺物は、古墳時代の土器が少量出土しているが第９図９～11の土器の中では、古墳の詳細な時期を決定できそうなものはなかった。一方、周溝底面付近から片岩の破片が出土している。一般的に県西部での片岩のあり方は、後期から終末期古墳の、横穴式石室材や箱式石棺材に使われており、主体部の構築材の一部の可能性が考えられる。

１号竪穴住居跡

土層の堆積

１号竪穴住居跡は、２号墳の北東部周溝覆土中に構築されており、遺構の確認面が周溝内に堆積する黒褐色土中であるため判別がむずかしかった。１B号竪穴住居跡の掘り込み後、さらにサブトレンチを入れて、土層の堆積を断面図B-B'のように認識し、２・３層を１B号竪穴住居跡の覆土と考え４・５層については周溝堆積か別遺構の堆積と考えた。その後、４・５層の掘り込みによって外側に広がる別の竪穴住居跡のプランとカマドの残存が確認され、４・５層とも１A号竪穴住居跡の覆土であることが判明した。

カマド

竪穴住居跡はカマドの造り替えを行っており、古いカマドが北壁西寄りの位置から煙道の一部のみが確認された。煙道部のみ確認された北壁のカマド（カマドA）は燃焼部や袖部がすべて削平されて竪穴住居跡の壁及び壁溝によって垂直に切り込まれていた。東壁側のカマド（カマドB）は袖部に自然石を使用したカマドで、燃焼部から土師器の甕が、カマド燃焼部奥から自然石と土師器椀を組み合わせた支脚状の施設が見られた。カマドＢは左袖部が一度掘り込まれて再度構築されており、カマドＢの位置で２回の造り直しの可能性が考えられる。

床面及びピット

床面はカマドＢ前面を中心に硬化しており、カマドＢ左側の東壁はカマドＢ右側よりも奥まで掘り込まれ、貯蔵穴状のピットが確認された。床面西側中央部には底面径約55cm、深さ15cmの底面が平坦な穴が開き、床面からの連続した硬化が捉えられ、一段低くなった床、あるいは作業ピットのように使用していた穴と見られる。

出土遺物

出土遺物は、土師器の内黒椀３点と土師器の甕、砥石３点が出土している。食膳具としては土師器の椀が主体で須恵器の坏が出土していないことから10世紀以降の時期のもので、土師器椀の形態や甕の口縁部の形状等から10世紀代後半、第３四半期頃のものかと考えられる。

平面形

平面形は遺構図に示したように、１Ａ号竪穴住居跡と１Ｂ号竪穴住居跡の２つの遺構とした。まず遺構の確認時に周溝堆積土よりも暗い色調の範囲の１Ｂ号竪穴住居跡が確認された。このプランでカマド及びカマドに伴う遺物が出土したため長方形の東カマドのタイプの住居と認識し、１Ｂ号竪穴住居跡の外に広がる暗い色調の堆積層（４・５層）を別遺構と捉えた。その後５層の堆積を掘り込んではじめて、さらに北側に古いカマドの残存、古いカマドに伴う壁が確認されたためこれを１Ａ号竪穴住居跡とした。しかし、古いプランは掘り込まれたり、部分的に埋められたりと本来の形状のまま残されていないと思われる。

最も初期の段階のカマドはカマドAであり、一般的にはシンプルな北カマドの方形プランが推測される。次に北カマドを廃止して、東カマドとしてカマドBを造り直し、同時にカマドBの左側の壁を掘り込んで拡張し、貯蔵穴状の穴を掘り、中央やや西寄りの床面に石を埋設する段階（１Ａ号竪穴住居跡）があったものと考えられる。最終段階は、土師器甕の出土した東カマドのカマドＢとＰ１とした浅い土坑を伴った長方形の１Ｂ号竪穴住居跡と考えられる。

以上のように、埋没土層の堆積と確認時の平面形、カマドの数から２～３回の部分改築か建て替えの可能性が考えられる。

その他の出土遺物

９～11の土師器は、９が古墳時代前期、10が後期頃か、11は内外面にミガキを施した５世紀頃の遺物と考えられるがいずれも残存率が低く古墳の時期決定できるようなものではない。

調査地区内からは、古墳、竪穴住居跡どちらにも属さない古い時代の土器や石器が出土している。ほとんどの遺物は、古墳の周溝内や平安時代の竪穴住居跡内に混入していたもので、12は縄文時代早期の尖底土器、13～15が加曽利Ⅱ・Ⅳ式期、16～24は堀之内Ⅰ式期を中心とした縄文土器である。25は撚糸文のついた土器、26は土製円盤である。27～29は弥生土器で弥生時代後期のものと考えられる。表採として掲載した石皿や打製石器は、試掘調査時は見られなかったので、おそらく調査直前の舗装路面の撤去工事に際して出土し、本来古墳周溝内に掘り込まれた近世以降の長方形の撹乱穴等から出土したものと思われる。これらは、周辺に広がる遺跡に埋没する遺物群を反映した内容のものと思われる。

まとめ

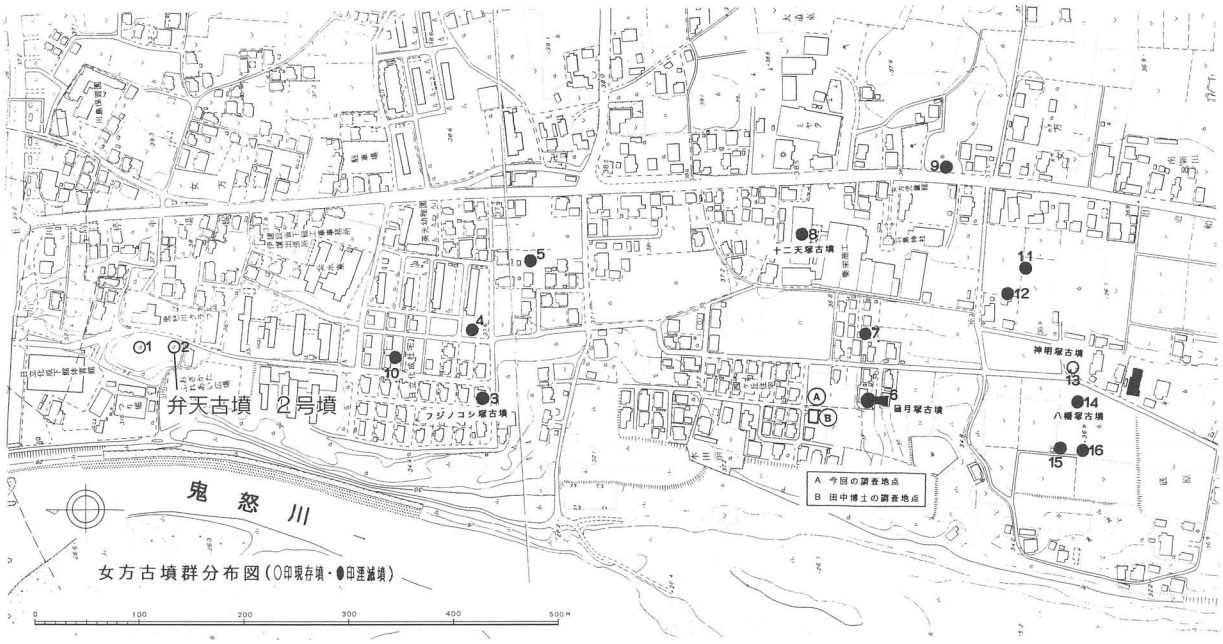
今回の調査では、弁天古墳群の２号墳の周溝部の一部が確認され、周溝が弧を描いていることから円墳で

ある可能性が強まった。出土遺物が少なく時期がはっきりしないが、主体部に使われることが多い片岩が周溝底部から発見されたことや、埴輪をもたないこと、僅かに古墳時代前期～後期頃の遺物を周溝覆土中に含むことなどから７世紀代の古墳の可能性を考えてよいかもしれない。

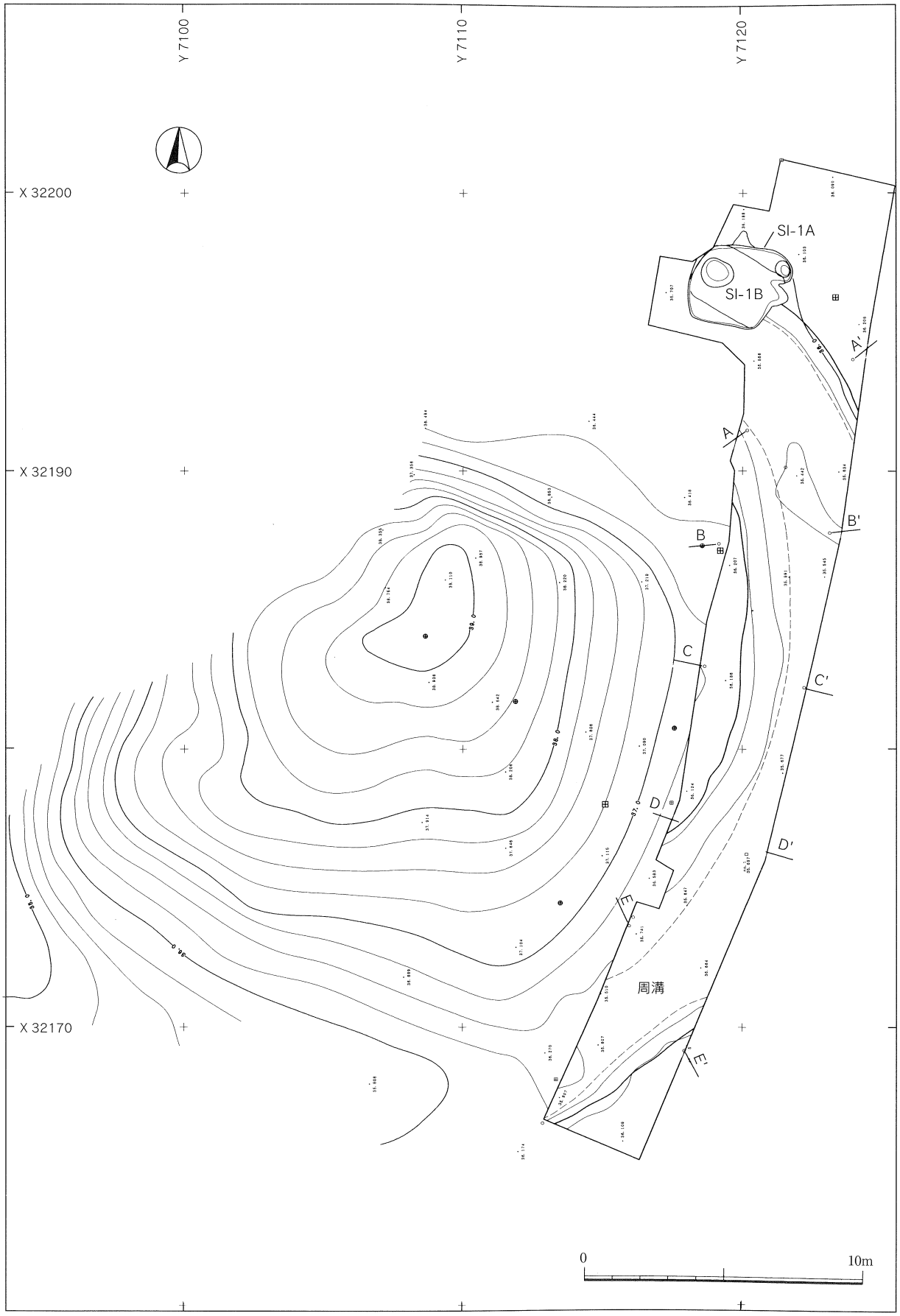
弁天古墳群の南方には、かつて女方古墳群があった。主体部に横穴式石室を持ち形象埴輪の出土している３号墳、粘土槨を持った前方後円墳である６号墳等が調査されており、現存する墳丘は神明塚古墳１基のみであるとされている。（西宮一男『女方・本田前遺跡緊急調査報告』平成10年）弁天古墳群２号墳はこれらの時代に続く時期の古墳と推測される。

また、古墳とその他の遺構との関係では、埋没した周溝覆土中から平安時代10世紀以降の竪穴住居跡が発見されたことから、この頃には２号墳の周溝が埋没していたことがはっきりした。

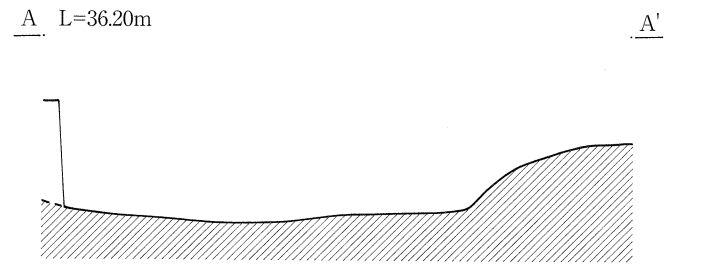
古墳と後の時代の竪穴住居跡の関係については、つくば市の中台古墳群や結城市下り松遺跡でも同様に埋没した古墳の周溝内に東カマドの竪穴住居跡が造られており、古墳群の周溝が埋まった後、10世紀以降の集落が立地している例は県内の他遺跡でも見られる。平安時代でも10世紀以降になると、一般の人々にとって、高塚古墳が祖先の墓域であるという認識が薄れていったのと同時に埋没した古墳周溝部の土地は、権利関係において一般の人々が占有し易い環境にあったのかもしれない。

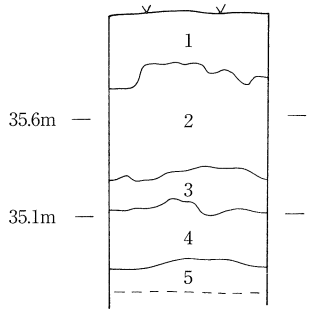


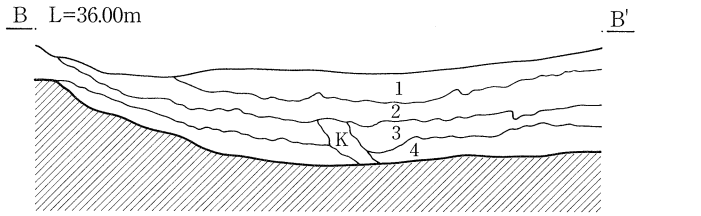
第５図　弁天古墳群・女方古墳群分布図（平成10年『女方・本田前遺跡緊急調査報告』より転載一部改変）



第６図　調査区及び弁天古墳群２号墳平面図（1：200）

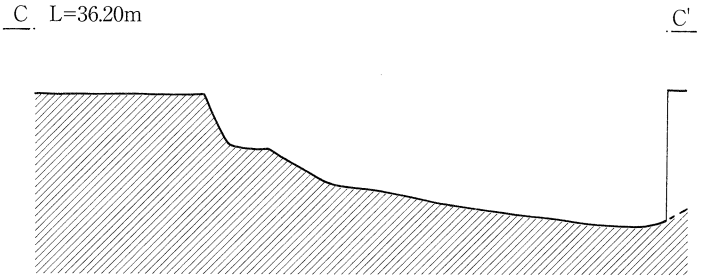


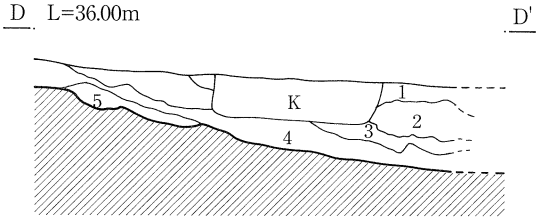




基本土層（Ｔ１内）

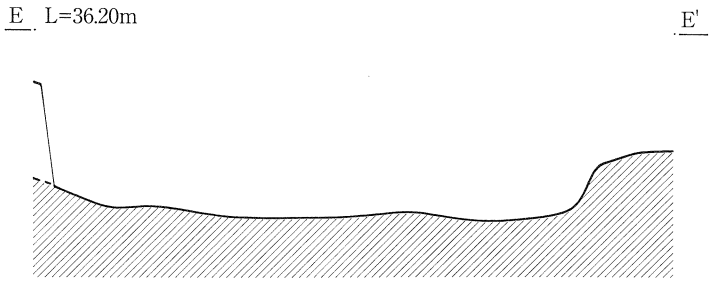
1層　7.5YR3/4　暗褐色　表土層
2層　7.5YR4/4　褐色　ハードローム層
3層　7.5YR4/4　褐色　やや粘性のある褐色ローム層。粘土粒子を中量、粘性のある黄褐色土ブロックを含む。
4層　7.5YR5/4　にぶい褐色粘土層　黄褐色土（鉄分含有か）・マンガン粒を含む。
5層　7.5YR6/4　にぶい褐色～灰白色粘土　鉄分粒・マンガン粒極少量。粘性強い。





周溝

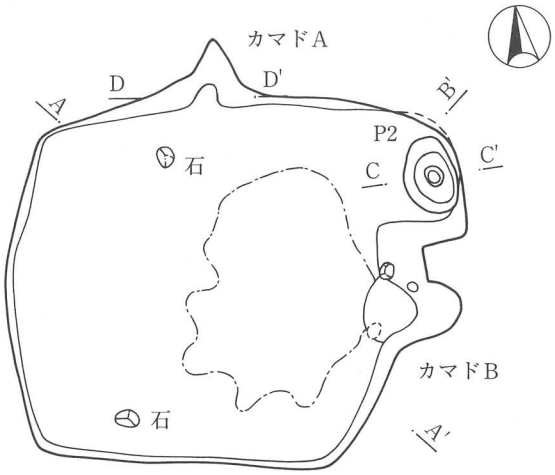
1　7.5YR2/2　黒褐色　ローム粒子中量、しまり有り。
2　7.5YR2/3　極暗褐色　ローム粒子中～多量、白色小粒やや多い、しまり有り。
3　7.5YR3/2　黒褐色　ローム粒子中～少量、わずかに軟らかい。
4　7.5YR4/3　褐色　ローム粒子中量、褐色ローム土、鹿沼小ブロック少量、やや軟らかい。古墳構築後の最初の堆積層。
5　7.5YR4/4　褐色　褐色ローム主体、ローム粒子、鹿沼小ブロック極少量、しまりあり。古墳構築時の堆積層。

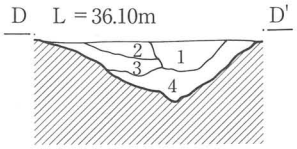


0　2m

第７図　周溝エレベーション・土層断面図　（Ｓ＝1：60）

SI1A





1号竪穴住居跡カマドA

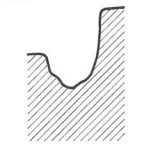
1　7.5YR4/3　褐色　灰・ローム小ブロック、やわらかい。
2　7.5YR4/4　褐色　鹿沼パミス粒、ローム粒子多量。
3　7.5YR4/3　褐色　灰・ローム小ブロック、やわらかい。
4　7.5YR4/4　褐色　ローム主体、灰少量、やわらかい。

カマドA土層

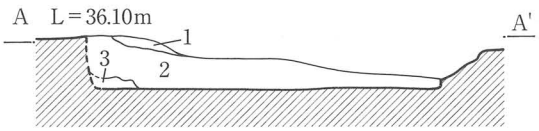
0　1m

(S=1：30)

P2

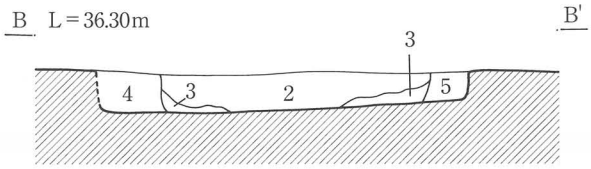


B'



1号竪穴住居跡

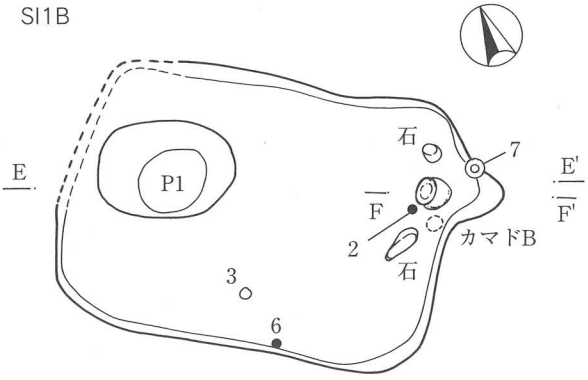
1　7.5YR3/2　黒褐色　ローム粒子少量、軟らかい。
2　7.5YR3/2　黒褐色　ソフトローム小中ブロック少量、鹿沼小ブロック少量、ローム粒子少量。
3　7.5YR3/3　黒褐色　ソフトローム中量、炭化物粒極少量、しまりあり。
4　7.5YR3/2　黒褐色　ローム粒子中量、白色小粒少量。
5　7.5YR3/2　黒褐色　ソフトローム小中ブロック少量、鹿沼パミス小ブロック少量、ローム粒子中。

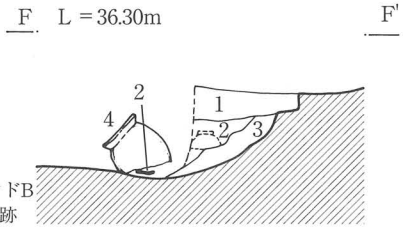


0　2m

(S=1：60)

SI1B



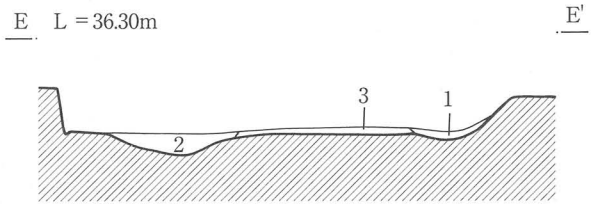


1号竪穴住居跡

1　7.5YR3/2　黒褐色　ローム粒子極少量、しまりあり。
2　7.5YR3/2　黒褐色　ローム粒子少量、ややわらかい。
3　7.5YR3/2　黒褐色　ソフトローム粒子少量、ローム小ブロック極少量、焼土・炭化物粒極少量、灰状黒灰物混じりの軟質土極少量、ややわらかい。

0　カマドB土層　1m

(S=1：30)



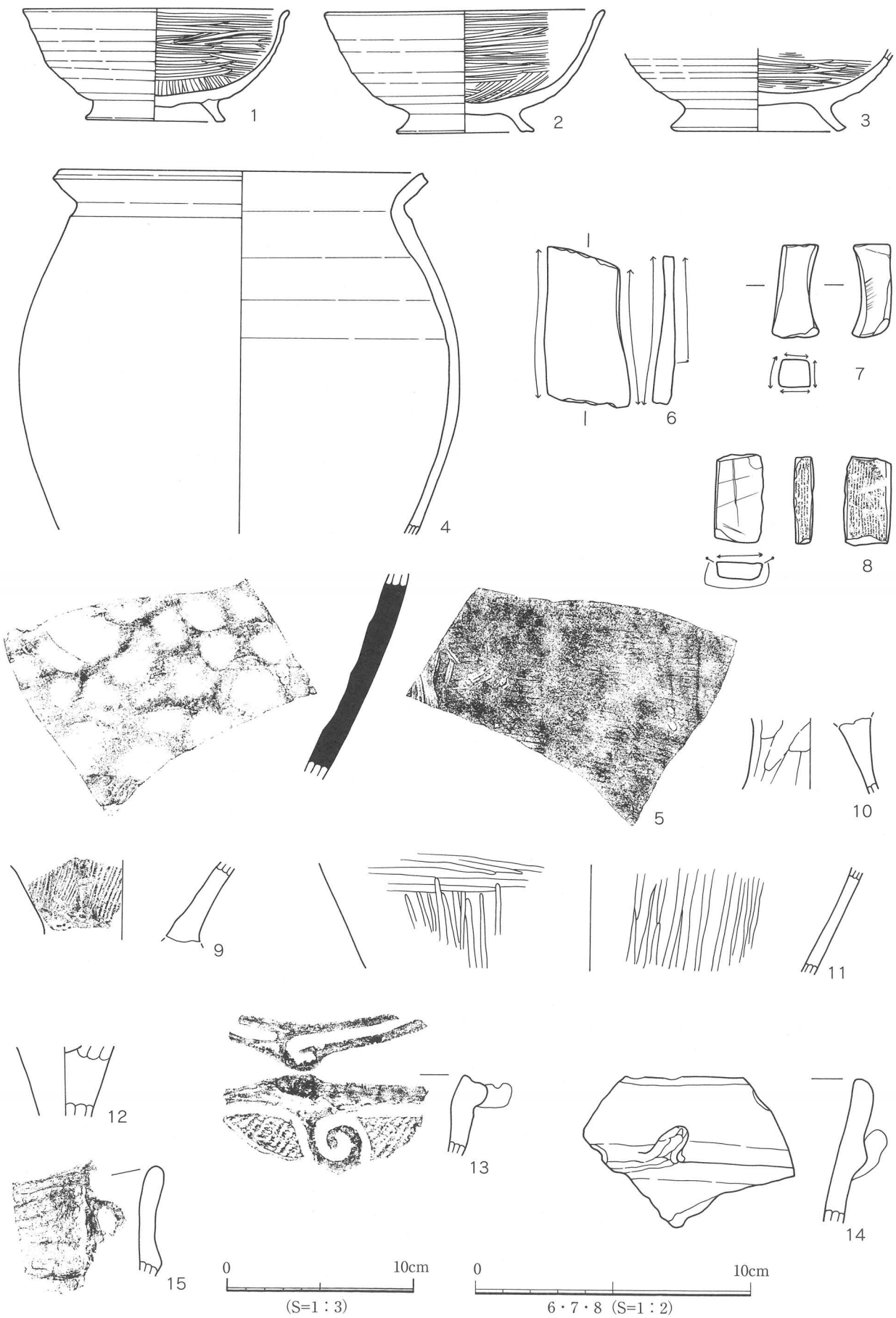
0　2m

(S=1：60)

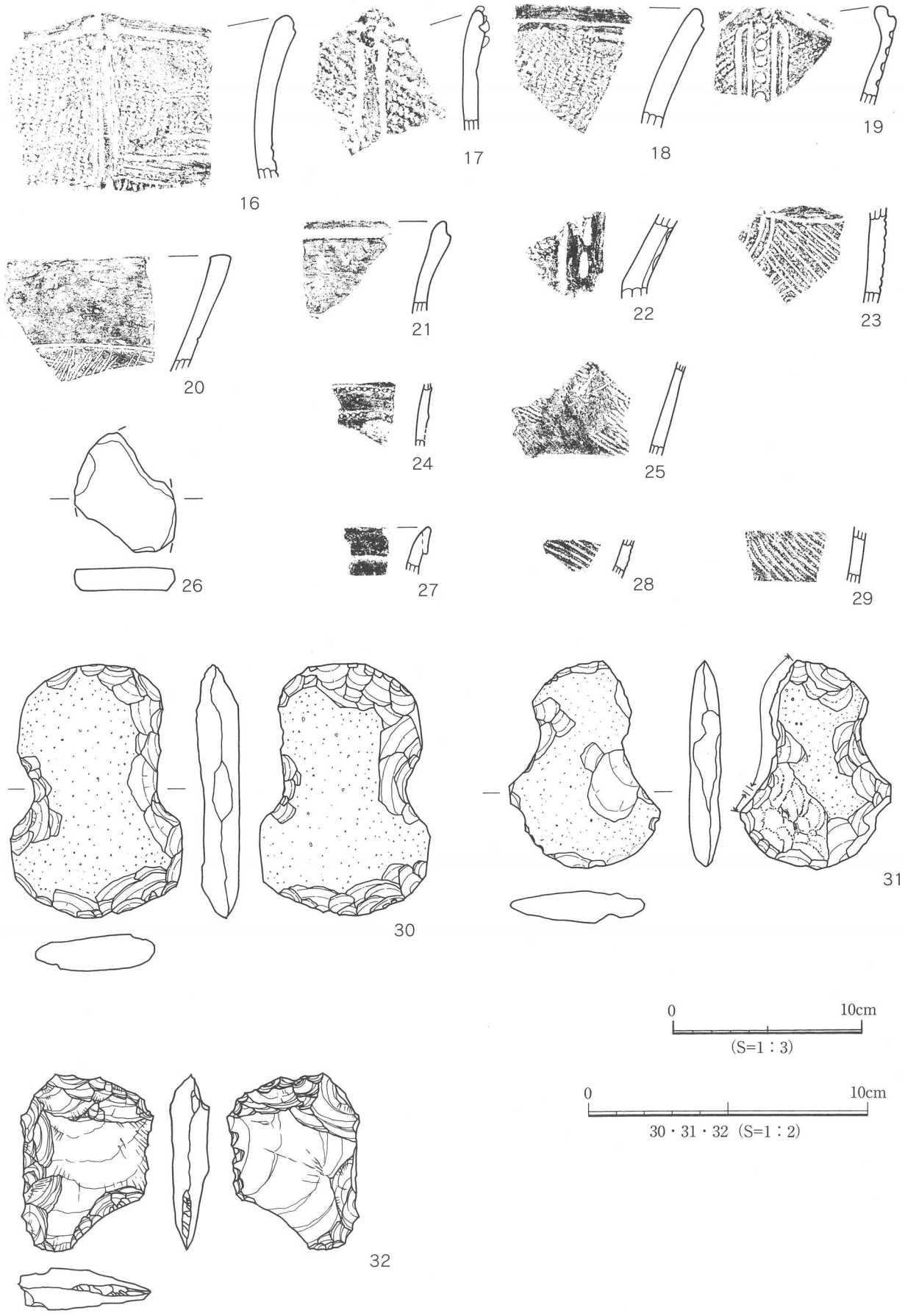
1号竪穴住居跡

1　7.5YR3/2　黒褐色　カマド燃焼室下層の堆積土、焼土粒、カマド灰少量。
2　7.5YR3/3　暗褐色　P1覆土、ローム粒子中量、鹿沼パミス粒子少量しまりあり。
3　7.5YR3/2　褐色　床下掘り方土層、ローム中大ブロック主体。

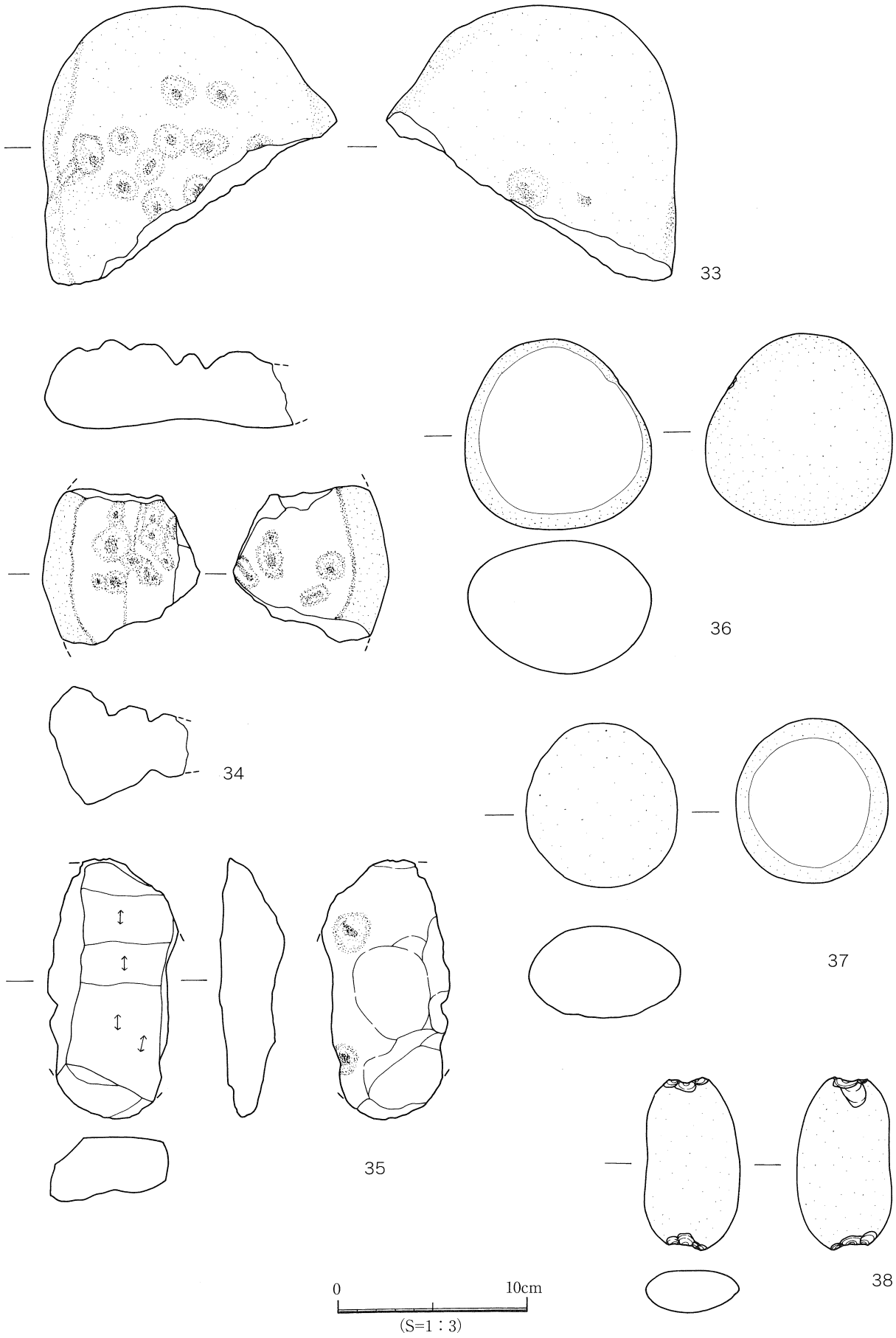
第8図　1号竪穴住居跡



第９図　出土遺物１


16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
10cm
(S=1：3)
0
10cm
30・31・32（S=1：2）

第10図　出土遺物２



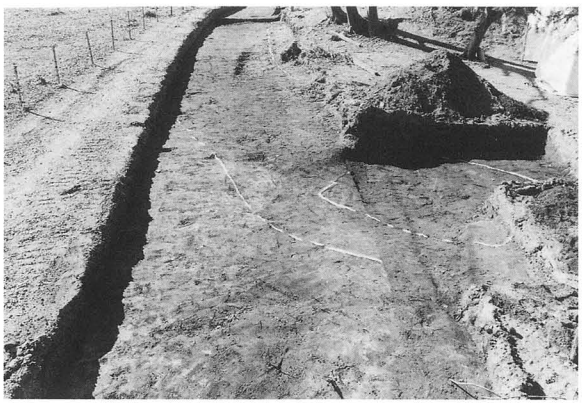
第11図　出土遺物 3

表１　出土遺物観察表

番号	出土遺構	出土位置	種別	器種	計測値			焼成	胎土（石製品は重量と石材）	色調	器形・技法の特徴、その他	残存状況	備考
					口径	底径	器高						
1	SI1	竈	土師器	椀	14.1	7.6	6.0	良好	光沢のある微粒子（金雲母か）	にぶい橙	内面ミガキ・黒色処理、外面回転ナデ・体部下端回転ヘラケズリ	90%	
2	SI1	床上	土師器	椀		7.4	6.5	普通	雲母微粒子	にぶい橙	内面ミガキ・黒色処理、外面回転ナデ・体部下端回転ヘラケズリ	70%	
3	SI1	覆土	土師器	椀	15.2	9	－	良好	雲母微粒子	にぶい褐	内面ミガキ・黒色処理、外面回転ナデ・体部下端回転ヘラケズリ	40%	
4	SI1	竈	土師器	甕	－	－	－	普通	長石・石英砂粒	にぶい橙	胴部外面斜方向のナデ、内面横方向のヘラナデ	40%	
5	SI1	覆土	須恵器	甕	19.6	－	－	普通	長石・石英砂粒、灰白色岩片角丸粒、海綿骨針	灰	外面平行叩き、内面同心円・無文あて具痕	胴部片	
6	SI1	覆土	石製品	砥石	－	幅4.5	厚1.3		65.0g、流紋岩			－	
7	SI1	覆土	石製品	砥石	長(9.0)	幅2.4	厚1.9		27.8g、流紋岩			－	
8	SI1	覆土	石製品	砥石	長(4.9)	幅2.4	厚1.9		18.3ｇ、流紋岩				
9	周溝１区	４層	土師器	台付甕	長(4.7)	－	－	普通	砂粒多量	にぶい橙	外面ハケ目	脚部	
10	周溝３区	４層	土師器	高坏	－	－	－	良好	長石・石英微粒	にぶい褐	外面ナデ	脚部	
11	２号トレンチ	覆土４層	土師器	甕	－	－	－	良好	細砂粒	にぶい橙	内外面ミガキ	胴部片	
12	周溝１区	覆土４層	縄文土器	尖底土器	－	－	－	普通	石英砂粒多量	にぶい橙	外面ナデ	底部片	
13	周溝２区	４層	縄文土器	深鉢	－	－	－	良好	長石砂礫多量	にぶい黄橙	渦巻文	口縁部片	加曽利ＥⅡ
14	周溝２区	覆土	縄文土器	深鉢	－	－	－	良好	細砂粒多量	にぶい黄橙	微隆起線文、舌状突起	口縁部片	加曽利ＥⅣか
15	周溝２区	４層	縄文土器	深鉢	－	－	－	良好	細砂粒	にぶい橙	微隆起線文、内外面ミガキ	口縁部片	加曽利ＥⅣか
16	周溝１区	覆土	縄文土器	深鉢	－	－	－	普通	細砂粒	にぶい橙	地文縄文、沈線文、内面ミガキ	口縁部片	
17	SI１	覆土	縄文土器	深鉢	－	－	－	普通	細砂粒	橙	地文縄文、沈線文	口縁部片	堀之内Ⅱか
18	周溝１区	４層	縄文土器	深鉢	－	－	－	良好	細砂粒		斜縄文、外面口縁直下に沈線文	口縁部片	
19	周溝１区	覆土	縄文土器	深鉢	－	－	－	普通	白色微粒	黒褐	単節LR縄文地文、円形竹管文を縦に配列し沈線文で区画	口縁部片	堀之内Ⅰ
20	SI１	覆土	縄文土器	深鉢	－	－	－	普通	微砂粒多量	褐	沈線文	口縁部片	堀之内Ⅰ
21	周溝３区	覆土４層	縄文土器	深鉢	－	－	－	良好	長石・石英細砂粒	灰褐	沈線文	口縁部片	堀之内Ⅰ
22	SI１	覆土	縄文土器	深鉢	－	－	－	普通	石英砂粒主体	にぶい褐	地文縄文、沈線文、刺突列点文	胴部片	堀之内Ⅰ
23	周溝３区	覆土	縄文土器	深鉢	－	－	－	良好	微砂粒	にぶい橙	沈線文	胴部片	堀之内Ⅰ
24	周溝１区	４層	縄文土器	深鉢	－	－	－	良好	石英細粒	黒	細い微隆起線上を連続的に刺突、微隆起線間は磨り消し。	胴部片	堀之内Ⅰ・Ⅱ
25	周溝１区	４層	縄文土器	深鉢	－	－	－	良好	微砂粒	にぶい橙	撚り糸文		
26	周溝２区	４層	土製円盤		－	－	－	良好	長石・石英主体の砂粒	にぶい褐			
27	周溝１区	４層	弥生土器	壺	－	－	－	普通	長石細砂粒少量	にぶい褐			
28	周溝１区	４層	弥生土器	壺	－	－	－	良好	長石・石英砂粒	にぶい褐	付加条縄文	胴部片	
29	周溝１区	覆土	弥生土器	壺	－	－	－	良好	石英・雲母粒	にぶい褐	付加条縄文	胴部片	
30	ＳI1	覆土	石器	打製石斧	長13.5	幅9.0	厚2.0		151.2ｇ、砂岩				
31	表採	覆土	石器	打製石斧	長11.0	幅8.0	厚1.7		152.2ｇ、安山岩				
32	周溝２区	覆土	石器	削器	6.4	4.7	1.5		38.71ｇ、ホルンフェルス				
33	表採		石器	石皿	長(14.8)	幅(15.7)	厚4.8		870.3ｇ、安山岩				
34	ＳI1	Ｐ２	石器	石皿	長(8.3)	幅(8.4)	厚6.3		296.4ｇ、安山岩				
35	表採		石器	砥石凹石	長13.8	幅6.8	厚3.5		222.4ｇ、安山岩				
36	ＳI1	覆土	石器	磨り石	長9.95	幅10.3	厚7.1		845.4ｇ、凝灰岩				
37	周溝２区	４層	石器	磨り石	長8.8	幅8.0	厚5.0		361.8ｇ、安山岩				
38	表採		石器	礫石錘	長9.3	幅5.1	厚2.2		148.9ｇ、安山岩				

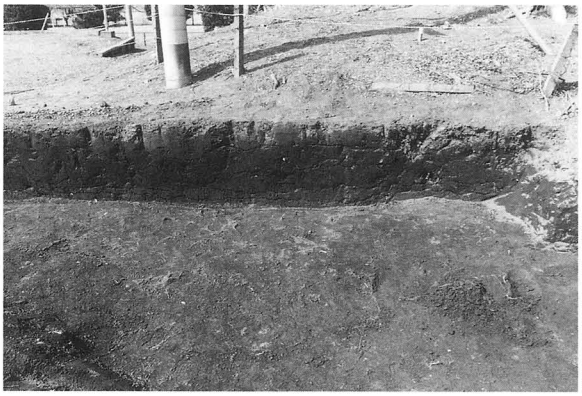
図版1

調査前風景



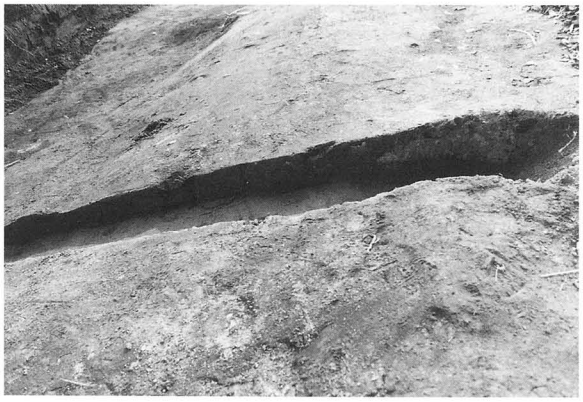
遺構確認状況

調査区南部周溝土層断面(1)



調査区南部周溝土層断面(2)

調査区北部周溝土層断面



調査区中央部古墳マウンド断ち割状況

周溝完掘状況

周溝出土片岩の出土状況

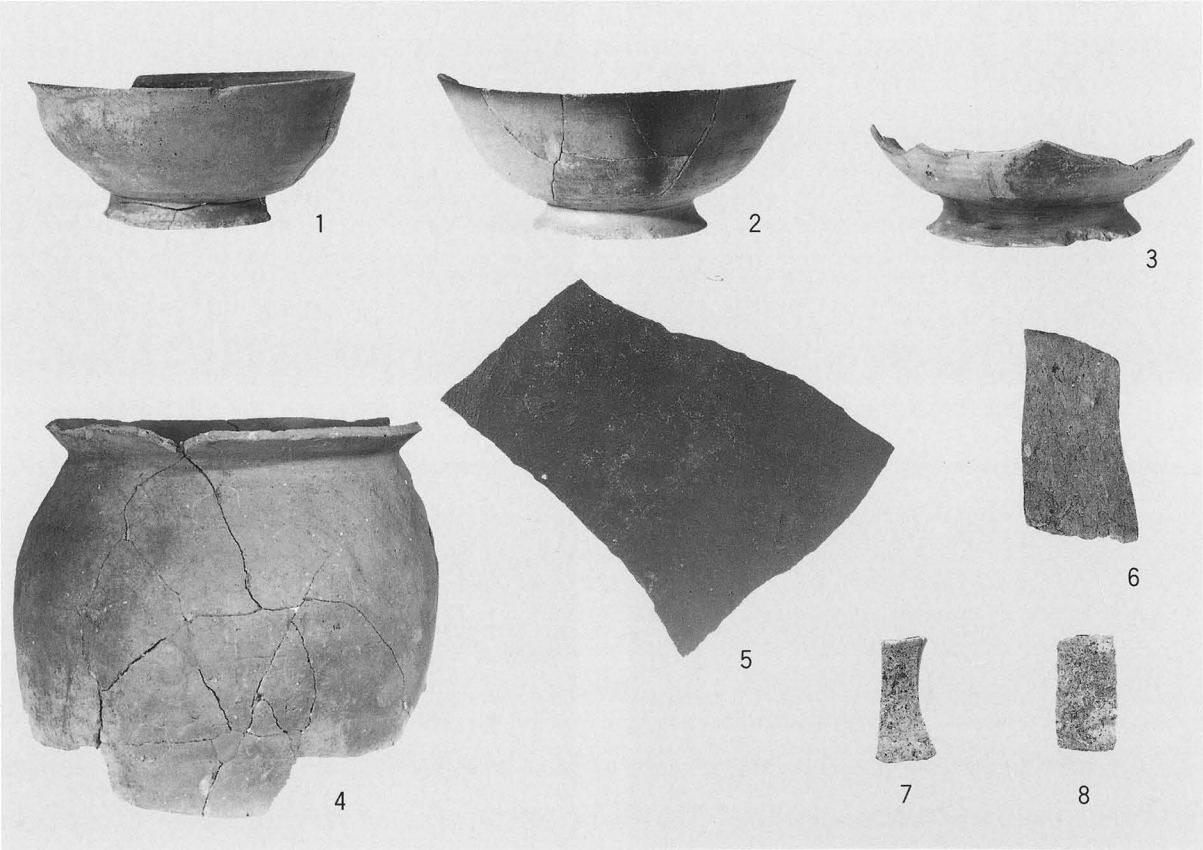
図版2

1Ｂ号竪穴住居跡遺物出土状況

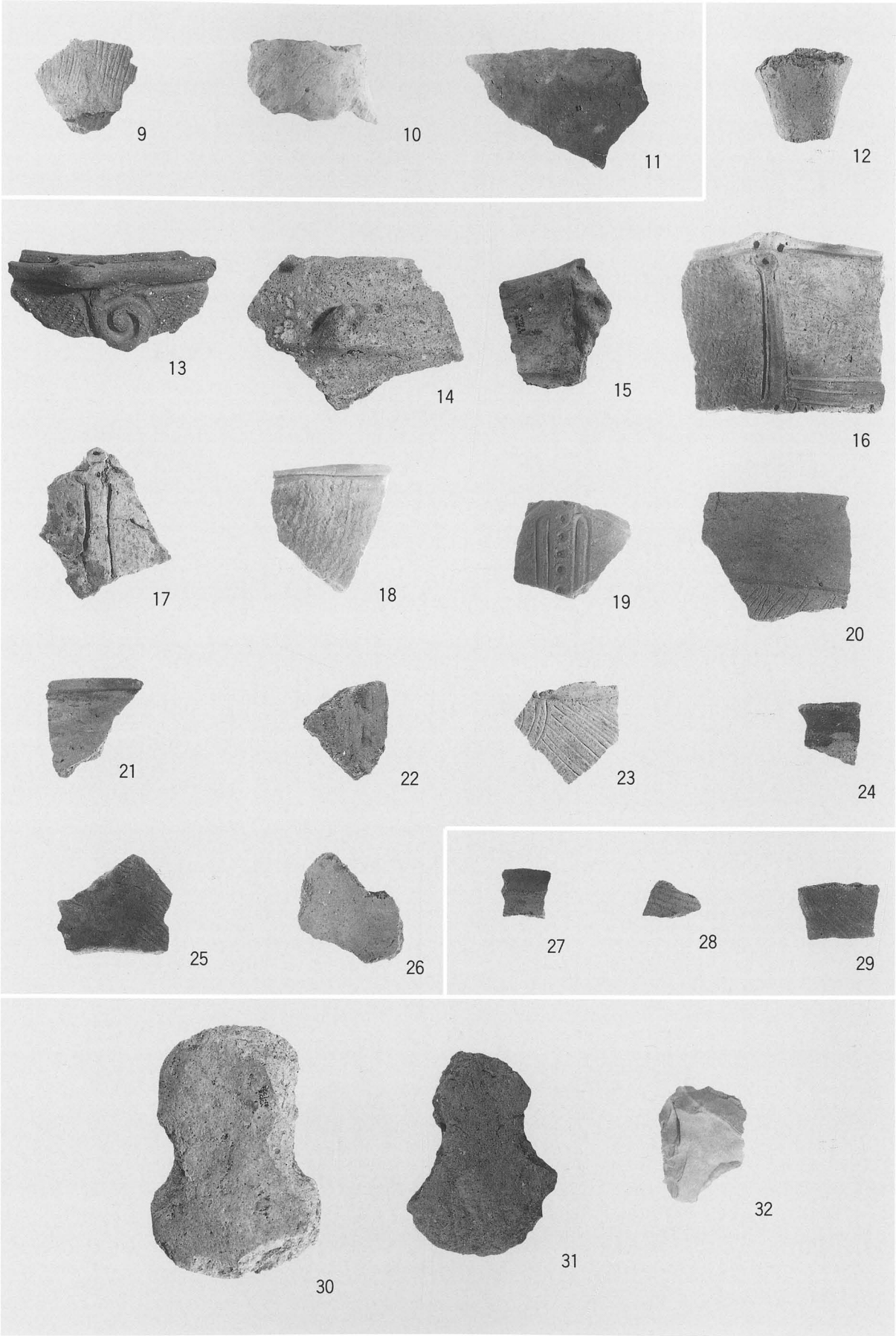
1Ａ号竪穴住居跡完掘状況

1Ｂ号竪穴住居跡遺物出土状況

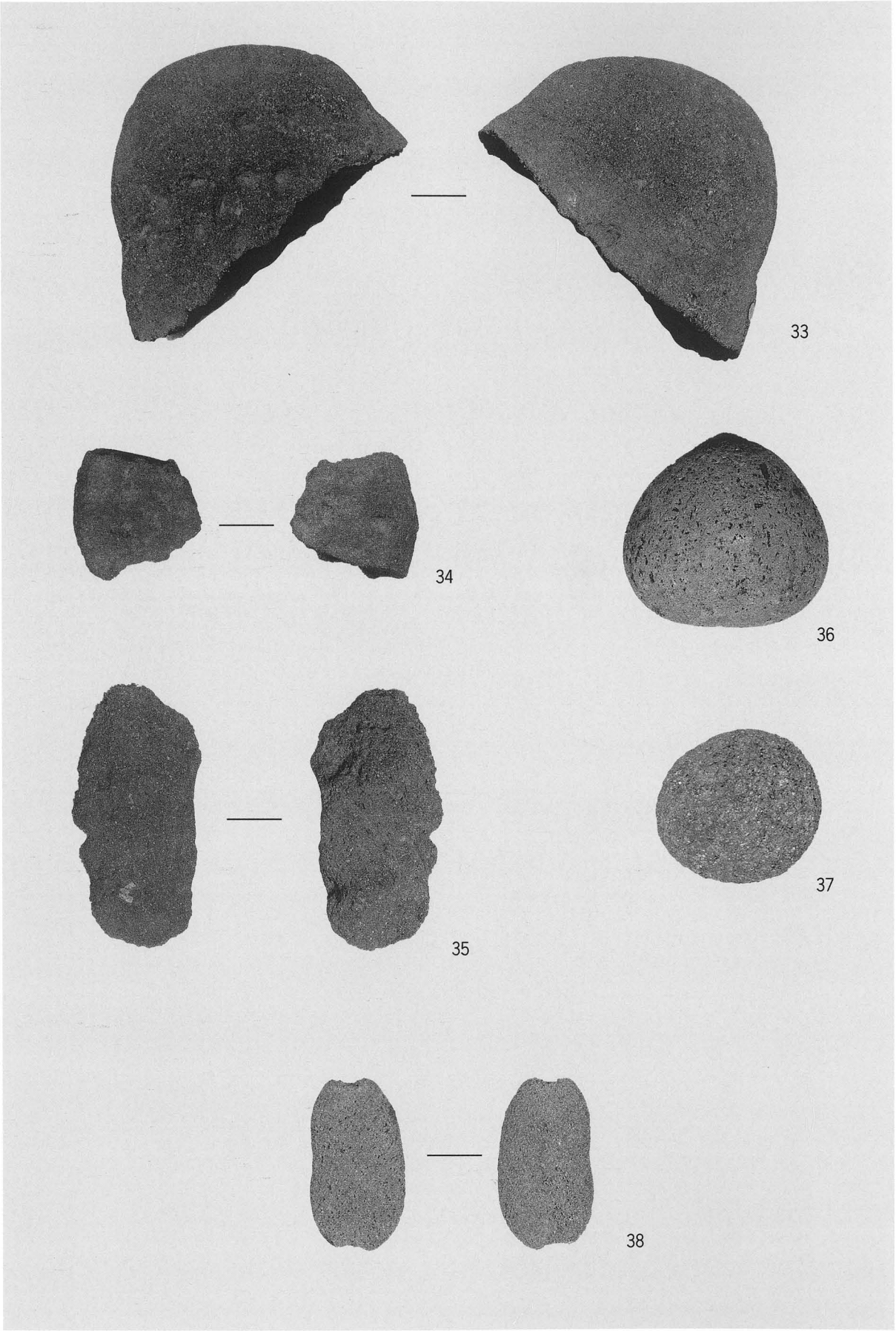
1Ｂ号竪穴住居跡遺物出土状況



出土遺物1



出土遺物 2



出土遺物 3

報告書抄録

ふりがな	べんてんこふんぐん
書名	弁天古墳群
副書名	
編著者名	土生朗治
編集機関	山武考古学研究所／〒286-0045　千葉県成田市並木町221
発行機関	下館市教育委員会／〒308-8616　茨城県下館市下中山732-1
発行年月日	2004年7月1日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
弁天古墳群	茨城県下館市大字女方字両海105-1の一部、111-1の一部	08206	029	36度17分24秒	139度54分45秒	20040217～20040225	144m²	市道拡幅工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
弁天古墳群	古墳 集落	古墳時代 平安時代	竪穴住居跡1軒、周溝1条	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器	古墳周溝を確認する。

出土遺物及び図面等の取り扱いについて

項目	内容
水洗い	・出土遺物全てについて行った。
注記	・インクジェットプリンターを使用した。 ・遺跡略号(ベンテン古)・出土遺構(SI：竪穴住居等)・出土層位・遺物番号等を併記した。 ・また、土器細片については、同様の内容を明記したビニール袋に収納した。
復元	・接合は可能な限り行った。必要に応じてエポキシ樹脂を充填し、強度的に必要な最小限の復元を行った。
実測	・遺物実測図は、基本的に報告書掲載分について作成した。
台帳	・遺物台帳・図面台帳・写真台帳があり、それぞれの資料の検索が可能であるよう作成した。
出土遺物収納状況	・出土遺物は、報告書使用と未使用に分け、さらに未使用遺物は台帳記載遺物とその他の遺物に分けてコンテナあるいはダンボール箱に収納した。また、各箱には箱番号・収納内容を明記した。 ・なお、遺物については、注記番号・台帳番号・報告書掲載番号の3種類が存在するが、基本的に報告書掲載番号を優先して記載・収納してある。

茨城県下館市

弁天古墳群

発行　2004年7月1日

編　集　山武考古学研究所
発　行　下館市教育委員会
印　刷　株式会社　文化総合企画
千葉県富里市日吉台1-23-12
TEL　0476－93－0593